
続・クタビレ荘の生活

チラリズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・クタビレ荘の生活

【Nコード】

N1367C

【作者名】

チラリズム

【あらすじ】

あのバカな連中が帰ってきた。とんぼ町に佇むオンボロアパート『クタビレ荘』を中心に繰り広げられる、気合いとノリだけのドタバタコメディ再来。

1 話『クタビレ荘メンバー解体新書』（前書き）

商品名：続・クタビレ荘の生活。この商品は使用上の注意をよく読み、十分に気をつけて正しく取扱い下さい。よろしくお願いいたします。

1話『クタビレ荘メンバー解体新書』

お久しぶりな人も、はじめましてな人も、どうも。『クタビレ荘の生活』主人公を務めさせて頂いています……此これにて似手 完かんすけ助です。たいして成長していないまま帰ってまいりました。

作者も成長しておりません……たぶん。

前回、イイ感じで幕を閉じた『クタビレ荘の生活』が題名に‘続’とかカツコつけて再誕。

読者諸君！ 中途半端に帰ってきやがって……と思いながら読んでください。

さあさあ、舞台は前回から1ヶ月。

まずは俺を含めて、とんぼ町 阿修羅商店街にあるクタビレ荘の愉快過ぎて止められない仲間達を紹介しようと思う。

此これにて似手 完かんすけ助

20歳。

201号室在住。

常人クラス。

この作品の主人公でツツコミ担当の大学生。

回避力が長けている以外は普通な男である。

此これにて似手 終おわり羽里

13歳。

201号室在住。

神クラス。

一言で例えるなら最強。詳しく例えるなら、すごく最強。兄が好き（兄妹なので俺に相応しい彼女が出来るまで愛したいだけらしい）

俺が知らない間に通信教育で格闘技をマスター。203号室の飛美ピョン太から魔法書を貰い、2日でマスター（マスターするのに2年かかったピョン太、約一週間落ち込む）

魂を抜く能力を持つ。さらに大食い。

コイツの口からお腹いっぱい……という言葉聞いたことがない。

コイツの胃袋は宇宙の可能性あり。それで太らないから最強。

恥ずかしながらクタビレ荘に来てから最強と気付いた俺の実の妹やねん。

あいだ
間

別名フェノクロス。

?歳。

103号室在住。

神クラス。

絵を描くのが好きなクタビレ荘の管理人、皆からは間様と呼ばれている。

車椅子に乗っている美人な女性。

昔、『星の姫』という組織のリーダーで不思議な力を使う。

最近パソコンを買ってブログにハマっているらしく、使い方などを俺に聞くが……俺はパソコンを持っていないため、昔の友達から軽く教えてもらったのをうる覚えで教えている。

ほしだき
星崎 結衣

21歳。

103号室在住。

超人クラス。

間様の護衛忍者。普通女性なら、くのいちって言うのでは？　と言うツツコミは無しにしてほしい。

最近上忍になったらしいが、以前は中忍だったのか？

スタイルを変えようと日本刀を装備したが銃刀法違反のため、この国では大人しくしている。

日本刀も次の日には手放している。

それ以外で変わったといえばタバコの銘柄くらいだろう。いずれ葉巻を吸うような気がする。

チャールズ。

31歳。

101号室在住。

超人クラス。

戦争好きの軍人かぶれ。

チャールズ大佐。軍曹から昇格。

だが、それは飽くまで自称にすぎない。

鈴木 良平

すずき りょうへい

18歳。

元101号室在住。

変人クラス。

チャールズが好きなヒョロヒョロした体の男（ちゃんと飯食って肉つけるよな）

現在は除隊して渡米したという噂だが、偵察のために渡米したとも言われている。

カラスを使ってチャールズと文通したいらしいが、限りなく無謀である。

立花 麗華

たちばな れいか

17歳。

102号室在住。

超人クラス。

立花恵理華の双子の姉。

ベタなお嬢様口調。

刀好きで、左目に眼帯を着用。

何故か101号室の座を狙っている。

通販でまだまだ刀が増えているらしく、カスピ海ヨーグルト並に増加している。

たちばな えりか
立花 恵理華

17歳。

102号室在住。

常人クラス。

立花麗華の双子の妹。

しつかり者で、右目に眼帯を着用。

何故か鈴木良平のことが好きだったが、今は何とも思っていない。

最近、護身術をマスターしたらしく俺よりは強い。

いちげき ともぞう
一撃 友蔵

64歳。

202号室在住。

超人クラス。

一撃家の祖父。家訓好きの柔道家。
カメ〇メ波を会得したい夢を持つ。スピードタイプになりたいパワータイプみたいなジジイ。

いちげき こうたろう
一撃 光太郎

36歳。

202号室在住。

超人クラス。

格闘スタイルはプロレス。

一撃家の大黒柱。

現在出張中。

いちげき あいこ
一撃 愛子

35歳。

202号室在住。

超人クラス。

格闘スタイルは空手。

一撃光太郎の美人妻。握力がスゴい。

いちげき けんしろう
一撃 拳使郎

15歳。

202号室在住。

超人クラス。

格闘スタイルはボクシング。

一撃家の長男。

此似手終羽里に惚れているが、恋愛に発展することは無い。
だが、読者が無意味に応援すること……プライスレス。

いちげき はじめ
一撃 恥芽

11歳。

202号室在住。

常人クラス。

格闘スタイルなし。

一撃家の次男。

格闘の才能がないらしく、愛子さん以外の家族に見放されがち。

頑張れ恥芽！

飛美ピョン太 とび ぴよんた

？歳。

203号室在住。

変人クラス。

黒魔術にハマっている長身のウサギ男。

大学教師。

覚えている魔法&召喚……ファイアショット、サンダーボール、不思議の国のアース、ドラゴン、グレム……続きはWebで。

寿 千鶴 いずみき ちづる

享年15歳。

アパートの屋根などに在住。

常人クラス？

はわわわ……が口癖の癒し系な幽霊の女の子。

大坂 晶子 おおさか しょうこ

19歳。

常人クラス。

麗華ちゃんと恵理華ちゃんの友達で、美容専門学校に通う関西人の女性。

前回の最終話で俺に告白したのだが、恋愛ドラマの影響を受けた演技だった。

（それを聞いた俺はショックで3日寝込んだ）

シュバリエ。

28歳（12歳）

超人クラス。

美少女戦士。

元『星の姫』。現在は世界防衛指揮官。

天守閃幻てんしゅせんげんという名のデカイ槍を使う少女？

20歳の時に1年に1歳若返る呪いにかかる。

此似手終羽里に特別な感情をもつ。

実は錬金術をマスターしているらしい。

何故覚えているかって？ 作者の気まぐれにきまっている。

東野とつの

？歳。

何でも運び屋『蒼い空豆』在住。

『やりすぎ宅急便』宅配員。

超人クラス（男型ロボット）

空豆店長に造られたロボット兵器である。

空豆そごいまめ

43歳。

常人クラス。

笑顔が素敵な長身男。

東野さんに『蒼い空豆』を託して2号店へ。

キング。

？歳。

超人クラス。

『星の姫』をパクって『月の王』という組織を作った男。
間様にビンに詰められていたが現在消息不明。

以上がクタビレ荘に関わる人々の紹介である。
誰もが思うだろうが、この物語には登場人物が多すぎる。
が、果たして何人しか登場しないのだろうか？

「……兄さん、題名は変わらないの？」

「なに言っただ終羽里？ ‘続’が付いてるだろ？」

「……そっちじゃなくて ‘生活’の方」

「んーじゃあ誰か立候補ある人？」

3人が手をあげた。

一撃友蔵の場合。

「クタビレ荘の情熱」

暑苦しいわ！

星崎結衣の場合。

「クタビレ荘の暗殺」

怖いわ！

此似手終羽里の場合。

「……クタビレ荘の食卓」

うまい！ でも違う！

この話は無し。なかったことにしよう。

……ポンポン。

俺の腰あたりを、赤子をあやすかのように軽く叩く間様。

「完助殿、受けとるがよい」

ニコツと笑い、俺に回覧板を渡す。

そこには『続・クタビレ荘の生活始めますか?』と書いてあった。

これから始まるであろう災難な日々に立ちくらみを起こしながら、俺は涇々と丸と書いた。

1 話『クタビレ荘メンバー解体新書』（後書き）

この作品はチラリズムと、ご覧のスポンサーの提供でお送りいたします。

2話『チャイナ服は反則、て話』

君に問う。

運命というものを信じますか？

素晴らしい言葉ではありませんよね、憎たらしいくらい。

ドラマとかだと感動するものが多いですが、俺にとっては運命という名の死命なのですよ。

この運命からは逃れる術はない。選択肢の無いアドベンチャーゲーム……それを強制的にプレイさせられる俺を救える人は今のところ存在しないのだ。

あゝ訂正しよう、いませんね絶対に。

《都会の歩道橋》

都会と言っても微妙である。

クタビレ荘付近に比べたらって意味で、俺の実家である高級住宅街近辺の有名デパートなどには劣る建築物ばかりが並んでいる。

言っとくが自慢じゃねえぞ、大体みんなの街である物に自慢もへつたくれもないだろ。

とりあえず俺は裕福な家庭みたいなのが嫌いになったのだ、贅沢な話だが俺は一般的な生活が性に合っている。

だが、まあ阿修羅商店街には無いものがあつたりしてココは面白い。たまに終羽里と買い物に来るのだが今日はダメだ……来るべきではなかったのだ。

「……兄さん、チャイナ」

妹の終羽里が歩道橋の真ん中あたりでピタリと止まって言った。

「あはは、そんなわけないだろう……コスプレ大国の秋葉原じゃあるまい……し？」

チャイナじゃん！

定番の格闘ゲーム『ストリートファイター』のチュン○ーみたいなチャイナ女が二足歩行しているパンダを連れて歩道橋を堂々と歩いてんじゃん！

「スミマセンそのお二人さん、クタビレ荘を知ってるアルか？」

頭の中のシグナルが鳴る。

ピーピー、警告！ 警告！

関わるとマズイ、速やかに逃げるべし。

「知りません」

「そんなことないネ、アナタからはクタビレ荘オーラが漂ってるますダヨ」

どんなオーラだ？ 見てみたいよ実際に。

「まずは自己紹介ネ、アタイはシェオルン。この子はパンダの阿呆豚^{とん}。1週間くらい前に中国から不法入国してきたアルよ」

阿呆‘豚’！

なら、ここは豚にするべきだろ。しかもサラッと犯罪染みたこと言わなかったか今！？

いや……そんなことはどうでもいい。

俺の中にいるもう1人の俺が告げている。

逃げろ……逃げて……逃げてください。

逃げなきゃダメだ逃げなきゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ。

結論、逃げないように逃げよう。

「……兄さん、頭の中で崩壊しちゃダメよ」

あああ、妹に心の声を読まれた！

バキッ！

「がはっ！」

パンダに殴られた。

ボフッ！

「げはっ！」

パンダにボディブローされた。

器用なヤツだ。

ガブッ！

「ぎゃあああ！」

パンダに……食われてたまるか！

頭を食われかけたが必死にもがいて後ろへ下がる。

「何すんじゃテメエ！」

頭からダラダラと血を流しながら俺はパンダに向かって叫んだ。

「ウルセエぞ、さっさとクタビレ荘の場所言わないと太平洋に沈めるぞクソガキ」

パンダが当たり前のように喋った。

そうか、パンダも喋る時代なんだ。

ここは納得するべきだろう、だって知り合いに喋るウサギがいるくらいなのだから。

「お、教えてもいいが凶暴なパンダはお断りです」

「失礼なこと言うないネ！ この子は我が国では有名な戦士『月天心』の生まれ変わりアルよ！」

「所詮はパンダだろ？」

「……兄さん、失礼なことってはダメよ」

妹が珍しく他人^{パンダ}に肩を貸した。

「……パンダは貴重な食べ物なのだから」

やはり妹は妹だった……それでこそオマエだ！

ギロツとパンダが獲物を狩るような勢いで終羽里を睨み付けた。

「……なに？」

終羽里はパンダを頭から丸かじりにする勢いで見上げて睨み付けた。
「……………」

パンダは言葉にならない言葉を発しながら恐怖のあまり赤い汗を流した。白と黒で構成されているパンダに赤が加わった。

見てる方も痛々しい。

目で殺しかねない妹の睨み付け……これは立派な革命的暴力というものだ。

くわばらくわばら。

《阿修羅商店街》

なんだかんだでココまで連れてきてしまった。
魅力的だよな、シェオルンのチャイナ姿。

揺れる爆乳……長くてツヤツヤの美脚！

コイツに、このスタイルに負けたのか俺は。

「くつ、今月はサイフの中がピンチだと言うのにバス代まで俺の負担とは。大体パンダがバスに乗れたのが奇跡だよ」

「両手にスーパールの袋持つてちや説得力の欠片もないネ」

「必要最低限しか買つてねえよ！ 終羽里、お前も何か言つてやれ！」

「……ごめんなさい兄さん、袋の中に予定外の食物が多数あるの」

えええ！ いつの間に……。

「コ、コホン。あゝなんだ、どんな用件でクタビレ荘を探していたのかは知らんが、まさかウチで晩飯を食おうなんて思つてないだろうな？」

「心配ないヨ。お金無いから毎日スーパールの試食コーナーで食いつないでるアルよ」

迷惑この上ないな。

つーか質が悪すぎる。

「ホレ……着いたぜ、ココがクタビツ！」

ビュオン！

嵐のような風が吹いた。

先ほどの穏やかな表情が一変、妖艶な目付きのシェオルンが猛スピードで202号室へ。

同スピードで後を追うパンダがシェオルンを追い越して202号室

の扉を蹴り破る。

バキッ！！

「ウリヤアアア！ 一撃光太郎！ いざ尋常に勝負アルヨ！」

トントントン。

中国四千年ファイティングポーズも虚しく、一撃光太郎の妻……愛子さんが夕食を作っていた。

「あら、シエオルン……ごめんなさいね。光太郎さんは出張中ではないのよ」

「がーん！」

シエオルンが崩れた、ついでにパンダも崩れた。

「何しに来やがったんだよ！」

部屋の隅で携帯ゲーム機『BS』をしながら拳使郎が言った。

どうやらシエオルンは一撃家と知り合いのようだ。

険しい顔でシエオルンを威嚇する拳使郎だったが、玄関に立っていた俺と終羽里を見て……いや、終羽里だけを見て恥ずかしさの余りに女々しくうつ向く。

「どーしたの兄ちゃん？ お腹痛いの？」

恥芽が心配している。

いろんな意味で弱いぞ拳使郎ちゃん。

「ぐぬぬ……十年前に総合格闘技戦で光太郎に負けた父の仇をとりにきたヨ！」

立ち直るシェオルンの脳内には今まさに、波動拳コマンドが入力されていることだろう。

「フム、お主の父を倒したのは光太郎ではなくワシじゃぞ」

床に座って紙に『優柔不断』と書いている最中の一撃友蔵が立ち上がる。

さつきから何を渋い顔で書いてると思ったら、家訓ジジイめ。

「あら？ そーでしたのお父様」

「アイヤー！ 人違いだったネ、でも好都合アル……覚悟するヨロシ！」

友蔵に襲いかかるシェオルン。

「じゃ〜んけ〜んポン！！」

友蔵はグー、シェオルンはチャキ。シェオルンが負けた。

「む、無念」

ガツクリと膝を折るシェオルン。

「何故にジャンケン？」

俺はシェオルンに尋ねた。

「我が一族は暴力禁止アルね、だから決闘の日までジャンケンの修行だけに明け暮れたヨ」

嘘つけ！ さつきの総合格闘技の話はなんだよ！

「まだまだ修行が足りんわい！」

たかがジャンケンに勝ったくらいで図に乗る友蔵。

「覚えてるアル！ 行くネ阿呆豚！」

パンダと一緒に走り去ろうとしたシェオルンだったが。

「待つのじゃシェオルンとやら……」

騒々しかったのか、結衣さんを従えて間様が現れた。

「急で悪いが、庭に使われていない小屋があるから住んでもらえるか？」

「ありがたき幸せアル」

シェオルンは間様に深々と頭を下げた。

え！ ココに住むの！

後から聞いた話。

間様がシェオルンをクタビレ荘に招いた理由……もちろん面白いヤツだから、である。

こんな理由このアパート以外はあり得ないな。

プロフィール

クタビレ小屋

シェオルン。

年齢18歳。

超人クラス。

美しいチャイナ娘。

阿呆豚。

年齢2歳くらい。

喋る暴力パンダ。

(つまりコイツ一族と無関係じゃん)

3話『パンダ以外の白黒関連はコレだ』（前書き）

今回は結構マニアックですので、ネタがわからない人はノリで笑ってください。

3話『パンダ以外の白黒関連はコレだ』

人間一つや二つの秘密はある。

ちなみに俺は秘密が………数えきれないくらいあるな。
もちろん教えない。

そして夜中のことだ。俺は、ある姉妹の秘密を見てしまったのだ。

《クタビレ荘…… AM・3:05》

窓を叩く風の音で目が覚める。

「うー完全に目が覚めちまった」

こんな時は便所で用を足したら意外とグッスリいけるかもしれん。

俺はトイレのドアノブに手をかけた、その時。

微かに聞こえる羽ばたく音。

バサッバサッ……。

「鳥？」

俺はトイレのドアノブから手を離し、音の聞こえる玄関の扉を開けた。

そして見た！

空を舞う二人の姉妹を！

夜でもハッキリわかる……立花麗華に黒い羽根、立花恵理華に白い羽根が背中から生えている、月明かりに照らされて優雅に飛ぶ二人。すると麗華ちゃんが俺に気付き、脇から光る物を出した。

「コレクシヨン NO・109『きりまんじゃろ斬利正邪呂』……参りますわ」

ジャ、ジャパニーズソード!!

「チエエエストオオ!」

「ぎゃあああ!」

斬られる前に、俺は失神。その場に倒れた。

《クタビレ荘…… AM7:20》

ちよつと怖かったが、俺は麗華ちゃんに夜中のことを話した。

「何を朝っぱらからクレイジーな冗談を言ってますの完助?」

まだ眠いのか、パジャマ姿の麗華ちゃんが目を擦りながら言った。

「冗談じゃないってば!」

「どうせ夢でしょ」

するとヒョコツと麗華ちゃんの背後から、すでに制服に着替えている恵理華ちゃんが顔を出して言った。

「きつと疲れてるんですよ完助さん」

「で、でも」

うゝん怪しい。

とぼけているようにも見える。

「ところで完助、私は最近犬が欲しいんですの」

うゝわ、強引に話変えてきたよ。ますます怪しいな。

「犬ってチワワとか?」

「完助みたいに扱いやすい性格の‘犬’が欲しいですわね」

え! 犬ってそっちの犬(奴隷)!?

ピンポン。

「すみませ〜ん」

102号室のチャームを鳴らす運び屋の東野さん。

となりに届け先人いるのに……。なんて天然な人なんだろう。

「恵理華ハンコ」

「え、まさかまた刀？ 姉さん……いい加減にして」

トホホとした顔で麗華ちゃんにハンコを渡す恵理華ちゃん。

なんだかんだで許すんだ。

「ありがとうございま〜す」

そう言つて東野さんは荷を麗華ちゃんに渡して、屋根から屋根へと跳び移りながら去っていった。

そーいえば東野さんはロボットだったな。

「……で、何やってんだチャールズ？」

俺は見逃さなかった。我が201号室からコソコソと出てきたチャールズ軍……。じゃなくて大佐、ええい！ ややこしい！

チャールズ大佐の姿を。

「な、ななな何でもないで〜す完助ボ〜イ！」

「その右手に隠し持っている本は何だと言ってるんだ」

バサッ！

チャールズが本を落とした。

これは……。これは俺の宝物！ 朝っぱらからこんな物を人の家から

盗むな！

「なんの本ですか？」

ああ！ お約束のように拾っちゃダメだ麗華ちゃん！

「『スゴい。私の中に……イヤらしい先輩の〇〇〇が……』 ってコレって！」

「うあああ！ 読者がドン引きするくらいまで読んじゃダメだ麗華ちゃん！」

本を叩きつけて、フルフルと震えだす麗華ちゃん。

「姉さん？」

「来てはいけませんは恵理華、あなたを巻き込みかねないから」

れ……麗華ちゃん。

「万死に値しますわ！」

死んだ！

まだ3話なのに俺死んだ！

お前のせいだチャールズ、『続・クタビレ荘の生活』の初登場でイメージが下がることするからだ！

「滅殺！」

『名刀・夜枯美根裂空羅』と書かれた箱から刀を取り出し、チャールズ目掛けて走り出した。

あゝ俺は無視ですか……よかった。

「なんやなんや？ 暴れとるな、まるで暴れん坊〇軍や」

カジュアルな服装で現れたのは大坂晶子ちゃん。

「晶子ちゃん、これから専門学校かい？」

「まあな、ちょっとバカ姉妹の姿を見に来たんや」
え、私も！？　と言いたそうな顔の恵理華ちゃん。

「ヒドイ晶子さん」

「あははは、冗談やがな恵理華！」

バシツと笑いながら恵理華ちゃんの背中を叩く。

「ところで晶子ちゃん、あの子止められないかな？」

「無理に決まつとるやろ、あんなもん止めれるの口〇キー・バル
ボアくらいやで」

目を覆いたくなる光景を見ながら、ほのぼのとする俺達。

「Nooo！　助けてください完助ボイ！」

チャールズも一応マシンガンで対抗している。頑張れチャールズ、
男をみせろ。

「じゃかましい！　俺の素敵な起床を邪魔するんじゃないやねえゴミども
！」

はい、結衣さん戦闘参加。

「長年の決着、今日こそ付けてやるぜ！」

「望むところですわ！　かかってきなさい結衣！」
今日もクタビレ荘は、平和、そのものだ。

そう、これが日常なのさ。

ダダダダダ！

キーン！ キーン！

手裏剣が飛び、弾丸が跳びかい、刀が血を求む。

その時、夜中に見た黒い羽根が俺の視界に入った。

やっぱり……夢じゃなかったんだ。

「姉さん！ 背中！」

「えっ！？ しまった……つい興奮して出していましたわ！」

興奮状態から正気に戻る麗華ちゃん。

戸惑いながら言葉を探す。

「え」と……あは、あはははは！ 私は人間をやめますわカンスケ
く……！」

バサバサツと空を飛び、刀を振りかざす麗華ちゃん。

すると恵理華ちゃんが背中から白い羽根を生やして麗華ちゃんのもとへ。

「姉さん！ マニアックなネタ禁止！」

「うぐっ！」

ゴキツと鈍い音がした、恵理華ちゃんが麗華ちゃんの後ろから首の骨を折ったのだ。

そのまま麗華ちゃんはボテツと地面に落ちた、黒い羽根もフツと消えた。

……。

……。

……。

「……と、言うことなんです完助さん」

恵理華ちゃんが詳しく話してくれた。

「へえ……まあこのアパートに住んでから少々の事は驚かなくなっただけ、まさか二人が天使と悪魔の間に生まれた子だったなんて」

「隠すつもりはありませんでしたの……ただ、なかなか言い出す機会がなくて」

髪を掻き分けながら麗華ちゃんが言った。

「アパートの住民は知ってるんですか結衣さん？」

腕組みしながら結衣さんが答える。

「完助以外が全員知っている」

ヒドッ！　なんで俺だけを仲間外れに！？

「こ、これから今まで通り接してくださいね完助さん」

恵理華ちゃんは優しく微笑んだ。

「もちろんだよ恵理華ちゃん」

チャールズのバラバラ死体を足下に、俺達の親密度が上がった。

「……で、まさか麗華ちゃん。眼帯を外したら覚醒するとかいうネタは無いよね？」

俺は冗談混じりで言った。

「あら？ フフ……それはドコの死神かしら？」

麗華ちゃん、顔は笑って声は笑っていませんよ。

4話『UFOって決まってあの形』

仏造つて魂入れず。この物語の作者にピッタリな言葉。

藪から棒。これはクタビレ荘にピッタリな言葉。

そう、ヤツらは突然やってきたのです。

ズズーン！

日曜日の昼過ぎに、クタビレ荘の裏手の空き地に宇宙船が墜ちてきた。

「ゴリアテダ〜！」

チャールズが叫んだ、ム〇カも驚いてメガネを落とすような大声で。

「間様、なんかスゴいのが堕ちてきましたね」

「うむ……映画でしか見たこと無いが、これが宇宙船というやつじやの完助殿」

はい、紛れもなく宇宙船です。つまりUFOです。

プシュー！

死にたければ入ってこい……みたいな感じに宇宙船の扉が開く。

「……行つてらっしゃい兄さん」

「ええ！？ 付いてきてくれないのか終羽里？」

「……ん、こーいうのは兄さんの役目だから」

最近マジで思う。俺って早死にするタイプだな……と。

俺はガタガタと震えながら船内へ。

なんだ、案外普通だな……船内の中央に置かれている鉄らしき物でできた箱を除いて。

うゝマジで怖い。久々にチビりそうだ。

プシュー！

だああ！勝手に箱が開いた！

せめて触ってから開けチクショー！

中には。

……娘だ、箱の中に十四・五歳くらいのライダースーツみたいなのを着た娘が寝ている。

あゝなるほど。コレが箱入り娘か。

ムクッ。

お・き・たゝ！

俺は全速力で外へ。

「ぎゃああ！宇宙人に侵略されるゝ！」

俺は妹に抱きついた……妹に……ん？

若干だが終羽里より小さくないか？

「離れる」

「ん？」

「離れるキサマゝ！」

はうつ！ シュバリエさん！？

「き、来てたんですかシュバリエさん！？」

「未確認飛行物体が発見されたと連絡があつたのだ！ たくつ、来て早々汚らわしい」

少し顔を赤らめながら顔をハンカチで拭くシュバリエさん。

もちろん片手には俺の身長よりデカイ槍、天守閃幻の姿があつた。

「宇宙人がいたのか完助殿？」

キラキラと目を光らせて興味津々な間様。

「はい、女宇宙人が」

残念ながら間様が頭の中で思い描いているタコ足宇宙人じゃありませんでした。

「うるさくて眠れないですよ」

宇宙船から出てきた女宇宙人。

「はれ？ ココは何処ですよ？」

「え、え」とココは地球と言って……」

パシューーン！

「侵略者は排除でス！」

俺が宇宙人に場所の説明をしている途中でチャールズがロケット砲を発射。

なんてヤツだ。直撃コースだ。

「ETフィールド！」

パキーン！

スゴい！ 『○Ｔ』と『エ○アンゲリオン』同時に二作品もパクった……なんて高等テクニクだ。
つか宇宙人が跳ね返したロケット弾がコッチに来た！

ドカーン！

運悪くシュバリエさんに命中。

「シュバリエさん大丈夫で……ひっ！」

爆炎から現れたシュバリエさんの右手は吹っ飛んで跡形もなかった。

「シュバリエさん！ 手が！ 手が！」

「心配ない、右手は義手だ」

うっそ！ 初耳だよ。

「敵なら戦うしかないぞフェノ」

「やれやれ、仕方ないのお」

シュバリエさんの天守閃幻が不気味に輝き、チャールズも銃を構える。

全員戦闘体勢だ。

言っておくがテメエのせいだぞチャールズ。

「私は怪しい者ではないですよ、ただの宇宙人ですよ」
「それって十分怪しいぞ」

「そうですね？ なら宇宙警察ですよ。そこの冴えない主人公面の人を円形脱毛罪の罪で逮捕するですよ」

女宇宙人は俺に向かってビシッと指をさした。
そんな罪はない……しかも俺はハゲてない！　しかも、っ
てなんだ、なら、って！？

「……宇宙海賊」

終羽里がボソツと言った。

「バ、バレたですよ！」

「おお！　なぜわかったんだ妹よ！」

「……ん」

終羽里が宇宙船を指さした、そこには『宇宙海賊シェリカ・ティール専用宇宙船』と書いてある。

果てしなくバカな宇宙人がいたもんだな。

しかしシェリカちゃんか……可愛い名前だ。

「ふええ、ティールお兄様」

「いや……ちょ……別に泣かなくても」

俺は彼女の両肩に手を置いて慰めようとした。すると彼女は俺の手を振りほどき叫んだ。

「気安く触るな！」

はい？

声が変わった、しかもシェリカちゃんの髪の毛が緑色から金色に！？

「シェリカをイジめるな！　生意気な地球人め！」

どーなってるんだ？

「うむ、二重人格みたいなやつじゃな」

間様がポリポリと頭を掻きながら言った。

「女から男になるものなんですか間様？」

「高橋○美子先生のマンガにもあるではないか」

たぶん○んま……のことだろう。

とりあえず、この二人で一人な兄妹は……たまたま地球に来てしまったようだ。

「人格が変わる条件があるのか？」

とっさに俺はティールとか言うヤツに聞いた。

「人格が変わる条件は小惑星が地球に落ちた時だ」

確率低ッ！

「冗談だ、本当は涙を流すたびにチェンジするんだ」
宇宙人でも冗談は言うんだな。

「地球侵略ではなかったのですか？」

チャールズが余計なことを言った、おかげでティールはギラリと目を光らせる。

「そんなに侵略されたければ、まずはそこの槍女からだ！」

お馴染みの急展開！

ティールは妙な形をした銃を取り出し、シュバリエさんに向かって引き金を引いた。

ビビビッ！

ヘンテコな光線はシュバリエさんに当たったが様子は変わっていない。

シュバリエさんは眉間にシワをよせて首を傾げる。

「な！ ブレインコントロール光線が効かないなんて？」

「なんかよくわからないけど、人を操る銃っぽいッスねシュバリエさん」

「私に命令できるのは私だけだ」

シュバリエさんがキツパリと言った。

もう完全にクタビレ荘ペースだ。すでに間様は観戦モードである。

「また面白いのが来よったの」

「そーッスね、間様好みなのが……」

額から汗が見られるティール。しかし臆することなく銃口を……

… 赤い彗星の終羽里に向ける。

あああ、命知らずめ。

終羽里を本気にさせたら新キャラだろうが次回から消えることになる。作者も手に負えない存在だからな。

その存在感に気付いたのか、ガタガタと震えだすティール。やはりボウヤだったか……。

ガチャン！

ヘンテコな光線銃はティールの手から離れて落ちた。

「ふええ、あの無表情なところが逆に怖いのですの〜」
あ……シェリカちゃんに変わった。
うゝむ、またややこしいキャラが増えたな。

「……兄さん、私になにか悪いことしたの？」
「気にするな妹よ」

プロフィール

クタビレ荘の裏手の空き地
シェリカ。

15歳。

宇宙人クラス。

ですの口調で緑髪の女宇宙海賊。
涙を流すと兄のティールにチェンジする。

ティール。

16歳。

宇宙人クラス。

この作品には珍しい普通な性格の金髪男宇宙海賊。
涙を流すと妹のシェリカにチェンジする。

5話『くだらない男に成敗を』

いつものように大学へ行き、いつものようにボロアパートへ帰るためにバスに乗る。

授業は退屈だ、バイトが無いとさらに退屈だ。

この時間帯、バスの中は貸し切り状態のように空いている。

もうちょっとバイトの時間を増やそうかな？ そーいえば花粉症が流行っていてクラスのヤツら少なかつたな。

そんなことを考えながらバスを降りて我が家へ帰宅。

ガチャ。

「……お帰り兄さん」

「うお！ た、ただいま終羽里。なんだよ、電気くらいつけるよな」
201号室の電気を消して、部屋の隅でココアを飲みながら座っている妹。服装は学校から帰ってきたままの制服姿。

一応この子も、中学生になりました。

ちなみに最近、ココアが妹のマイブームらしい。

……ん？ 部屋の中で音楽が流れているぞ。

「何聴いてんだ？」

妹が音楽を聞いているのは珍しいことだ、俺はCDコンポから流れる曲に耳を傾けてみた。

『時間とともに壊れるメロディ』

バラードか？

『食べたくなる大トロ五十貫』

なんだコレは！

歌詞の意味が全然わからん！

「なんて曲なんだ終羽里？」

「……大トロサンバ」

サンバ！？

どこにサンバが含まれているんだ？

うゝむ未知の曲だ。

《クタビレ莊庭……PM・18:30》

「なんだって？」

「だゝからゝ。花粉症を治す秘伝の薬品を持っていないか聞いているアル」

夕飯を作っている最中に、シェオルンに呼ばれた理由がコレである。花粉症で悩まされている人には悪いが、俺に花粉症なんて聞かれてもな……かかったことがないから正直困る。

「くしゅん！ 見損なったアル完助、男の中の男と思っていたのに見込み違いだったヨ！」

クタビレ莊に来て数日たらずのヤツに言われたかないわい。

「もういいネ。いざとなったらアタイには後十三回の変身が残っているから大丈夫アル」

そう言っただけで阿呆豚とともにクタビレ小屋へ入っていった。

フーザを軽く超える変身の数だが五回くらいで最早人間としての原形を留めていない気がする。

後ってことは最低でも一回は変身したことあるのかなアイツ？

「フッフッフ、なるほど花粉症は使えるピョン」

出ました！ クタビレ荘で俺と並ぶ不幸な男、飛美ピョン太！

「オイオイまた悪巧み……か？」

あれ？ 小さくないかい？

明らかに小さいよな？

また変な薬でも飲んだんじゃないだろうな、もしくは新しい黒魔術か？

「なんで小学校低学年くらいまで縮んでんだよウサギ野郎？」

最近のマンガで十歳の女子高生とか、チビッコ先生とかが人気あるらしいが。お前のキャラでは無理だ。

「いや、女子高生とかにキヤーキヤー言われたくて『収縮魔術』を頑張ってみたピョン」

「じゃかましいわ！ くだらないことを腕上げてんじゃねえよ！ キヤーキヤー言われたいって……発想も古い。オヤジかテメエは。」

「いや、昨日ハ〇ーポッターとかいう小説を読んで改めて黒魔術の素晴らしいさを感じたピョン」

コイツ……ブームの波に乗り遅れ過ぎてんな。

「では、さっそくだピョン」

ピョン太は黄色い粉の入った瓶を取り出した。

「なんだソレ？ もしかして『世界中の人間を花粉症にする粉』とかだったりするのか？ ははっ……まさかな」

「さすが完助君。よくわかったピョンね？」

いっぺん死んでこい！ この山猿が！ ウサギだけど山猿が！

そんなものを作って世界に蒔こうとしやがって……っ！ 『なるほど花粉症は使えるピョン』とか言ってたくせに、すでに用意できて

るって意味わからんわ！

さすがコメディだなオイ。

「くつくくつ、コレを使えば世界征服も夢ではないピョン。まず最初の犠牲者は此似手完助……キミだピョン！」

「待てコラア！ 作者はそんな壮大な話を望んじやいねえぞ！」
ウィルスとかなら映画になりそうな雰囲気だが、花粉症ってレベル低すぎるぞ。まるで深夜の低予算番組じゃねえかよ。

「さあ！ 今この瓶にかけた封印を解放するピョン！」
するとピョン太は呪文を唱えだした。

「テクマクマヤコンテクマクマヤコン」

有名な魔女っ子アニメの呪文を棒読みで唱えるなんて恥を知れ恥を！
つい先ほど覚えまして顔しやがって。

「もちろん世界のために阻止だ！」

俺は都合よく落ちていたバットを手に取り、ピョン太に向かって殴り付けた。

『注意……もちろん、そう都合よく落ちていないので探さないでください。あと人に向かって殴り付けるのも止めましょう。バットは飽くまでも野球をするための道具です、頑張ってね高校球児』

ガキーン！

鈍い音とともにバットが曲がった。

「フッフッフ、鋼鉄化の魔法だピョン。そんな攻撃は僕には通用しないピョン」

チクショウ……こんなバカでも一応魔術師というワケか。

瓶のフタに手をかける魔術師ウサギ。

「やめろピョン太！」

ババツ！

俺の叫び声を合図に現れた二人と一匹。

「いいかげんにするのじゃ！」

エントリーナンバー1番『一撃友蔵』の必殺みぞおちパンチが炸裂。

ボフツ！

「がふっ！」

「心置きなく死んで下さい」

エントリーナンバー2番『一撃愛子』の必殺ハイキックが爆裂。

ベキツ！

殺しちゃダメですよ愛子さん。 ってか首折れたんじゃねえかピョン太のヤツ？

首があるか知らないけど……。

「グオオオ！ フィニッシュ！」

エントリーナンバー3番『阿呆豚』の背骨折りが豪裂。

バキバキバキ！

「ぎゃああああ！」

豪快にウサギを抱きしめるパンダ。

パンダがクマみたいに吠えるなよな。

ポテッ。

ゴミのように地に倒れ、元の体の大きさに戻るピョン太。魔法の効力が切れたのか？

しかし、いくらなんでも「殺りすぎ」でしょ……エグい。ピョン太を直視できない。

「ふう〜。助かったぜジイさん」

「いやいや気にするな若者よ！ がっはっはっはっ！」

愛子さんが頬に手をあてて言う。

「この瓶を空けたら犠牲者は最初に空けた本人であるってことに気付かなかったのかしらねえ？」

言われてみればそうだ、世界征服とかいう問題じゃない。もともと花粉症で世界征服ってワケわからんし。

後ほど花粉症瓶は間様が回収。処分したらしい。

相変わらずのウサギに付き合いきれねえぜ……まったく。

6話『ヒーローは絶対正義とは限らない』

まだまだ序の口なクタビレ物語。

今回は麗華ちゃんとの何気ないお喋りから事件の魔の手が忍び寄る。

《102号室前》

「ふうん、じゃあ二人の正体は初めから晶子ちゃんも知っていたのか」

「最初に私たちが天使と悪魔の子って気付いたのは晶子ですよ」

「ほう……で、反応は？」

「まあそんなことどうでもいいやん！　にやはははは！　と言ってましたわ」

晶子ちゃんらしいな。

「そーいえば晶子、最近アルバイトを始めたらしいですわ」

「晶子ちゃんも頑張ってるみたいだね、ちなみに何のアルバイト？」

「たしか『邪道喫茶』とかいう喫茶店？」

邪道喫茶！？　いろんな意味で興味あるな。

絶対行かないけど。

「世界の平和は我々が守る！」

なんだなんだ？　俺の部屋（201号室）から声がするぞ？

確か部屋には終羽里がいるが大声で叫ぶような奴じゃない。しかも男の声だし……テレビか？

俺と麗華ちゃんは階段をあがって201号室へ。

「炊きたて洗隊炊飯じゃー！」「炊きたて洗隊炊飯ジャー？」

クタビレ荘の幽霊アイドル寿さんがテレビのヒーロー番組を見ながら叫んでいる。かなり興奮しているようだ。

「何やってんだデメエ」

ボコッ！

「ぐハッ！」

とりあえず寿さんと一緒にテレビを見ていたチャールズを殴る。

「殴ったネ！？」

幽霊の寿さんはなんとなくテレビを見るのは許す。だが無駄に大型テレビを持つているコイツ（チャールズ）は許せん。いい年してヒーロー番組なんか見やがって、自分の部屋で見やがってたんだ。

「容赦はいらん、殺れ終羽里」

「……御意」

ドドドドドドドドドドドドドド！

北斗○拳に引けをとらない終羽里の乱打。

殴られすぎで醜い顔のチャールズ。

「ぐっ……また打つタ、二百四十三発モ。上官にも打たれたことないのニー！」

そんなもん知るかア○口君。

「ところでなんなんだ、炊きたて洗隊って？」

「知らないんですか完助さん！？ いま子供にも大人にも人気があるんですよ。私も流行の波に飲まれちゃいました」

ウキウキな顔で寿さんが言った。ぶっちゃけ可愛い。

しかし俺はヒーローに憧れるのは小学一年生の秋に卒業しましたけど。

「そーいえば終羽里はアン○ンマン見てたよな昔」

俺は冷蔵庫からジュースを取り出し、ポテチを食べながらテレビの前に座りこむ。

「……空飛ぶ正義の食物」

ア○パンマンのことをそんな風に見てたのかコイツ。

「コホン……その中でも確か、犬の○ーズが好きだったっけ？」

「……歩く食物」

そのパターン止める。

「はわわわ、そろそろ出ますよ必殺技」

む、どうやら話は終盤らしいな。最近のヒーローの必殺技はどんなものかな？ 微妙に興味ある。

「くらえ！ 必殺バナジウム光線！」

ビビビッ！

ドカーン！

めちゃくちゃ健康に良さそうな技だな、しかも光線って……ウルト○マンかコイツら？

俺は何気なく新聞のテレビ覧で炊きたて洗隊炊飯ジャーのサブタイトルを見た。

『炊きたて洗隊炊飯ジャー・第三話……偽りの愛情表現』

なんだこのお昼のサスペンス劇場みたいなタイトルは！？

こんなのが本当に人気あるのだろうか？ みんな騙されてんじゃ？

「越後屋お主も悪よのう！」

炊きたてレッドが言った。

「いえいえお代官様ほどでは」

炊きたてブルーが言った。

「はっはっはっはっ！」

他の三人（イエロー、グリーン、ピンク）も含めて五人が笑った。
ん？　もしかしてコレが決め台詞か？　番組が違うだる番組が。

ピロリンピロリン。

エンディングが終わったと同時にニュースが流れる。

「えゝ速報です。とんぼ町の阿修羅商店街に我らがヒーロー『炊きたて洗隊炊飯ジャー』が悪の怪人を倒すために参上しました」

なんだとー！！

「きゃあああ！　炊飯ジャーが阿修羅商店街に！」

寿さんは興奮しながら外へ。

「きゃあああ！」

たくつ、うるさい幽霊だな……しかし今のは悲鳴か？

「どうしたんだよ寿さん？」

カチャと戸を開けるとそこには……。

「なんだこの状況は？」

俺が目にした光景は。今にもクタビレ荘を出ようとしている炊きたて洗隊炊飯ジャーの姿が……しかも両手には麗華ちゃんの刀コレクシヨンが。

「大変ですよ完助さん！　この人達、この人達」

どこからどうみても泥棒だ！

「いや、我々はその……高く売れるかなっと思って」

レッドが必死に言い訳をしようとするが、言い訳になっちゃいねえ。

「ホッ、私の銃じゃなくてよかったでゝス」

ボクッ！

「おブッ！」

麗華ちゃんは腫れあがったチャールズの顔に右ストレート。

「この害虫がつ！ よく私の刀を！」

炊飯ジャーに向かって走りだしたはいいが刀を持っていない麗華ちゃん。

そうだ！ 確か前に貰ったままホコリを被っていたコレクションN
0・36『魅頭妖感』みずよつかんがあつたはず。

「受け取れ麗華ちゃん！」

俺は麗華ちゃんに向かって刀を投げた、回復系の刀だが効力は無いから普通の刀だ……たぶん。

「駄目です！ なにか彼らにも事情があるはずです！」

と言いながら刀が麗華ちゃんに渡るのを阻止しようとする寿さん。もちろん幽霊なので体を貫通……麗華ちゃんに刀が渡った。

「はうう、死のう私」

心配せんでも死んどるぞ寿千鶴よ！

「あ……あ」

洗隊一同が錯乱状態。黒い翼を生やし、突撃する麗華ちゃん。

「ご託はいらねえクソ野郎！」

ダメだ、今回の麗華ちゃんは完全にキレてる。下品な言葉のうえに標準語だよ。

「立花流奥義！ 亡威斗女亞！（ないとめあ）」

まさかの闇属性が洗隊を襲う！

「バナジウム光線！」

抵抗する泥棒洗隊。マジで出たよバナジウム光線！ 実在したのか！

ガガガッ！

なんとか刀でガードした麗華ちゃん。ブツブツと何かを言っている。

「人斬りは所詮、死ぬまで人斬りい」

「大丈夫か麗華ちゃん？」

彼女はクルツと振り返りフツと笑みを浮かべた。

「大丈夫でござるよ剣〇」

大丈夫じゃないでござるな……この人。

「やはり完助殿がクタビレ荘に来てから毎日が騒々しいの」

「呑気なこと言ってる場合じゃないですよ間様。どーするんスか？

この状況」

「こーいう時は終羽里殿がアツサリと解決してくれるさ」
言われてみればそうだが。

俺はチラツと終羽里の方を見た。

バサッ！

黒い翼が生えた。

「うおおい！ 何生やしとんじゃ終羽里！？」

麗華ちゃんが妹の姿を見て目が点になる。

「……念じたら生えた」

普通は生えない……が、コイツなら何でもありか。

「……後はまかせて」

妹は麗華ちゃんの肩に手をポンツとおいた。

「アナタのその姿を見たら私の怒りも吹き飛びましたわ、もう好き
になさい」

終羽里はその言葉を聞き取ると……コクリと頷き、右手を前に出し

て唱えた

「……バ〇ス」

チュドーーン！

「ひぎゃあああ！」

炊きたて洗隊炊飯ジャーは空の彼方へと飛んで行った。よくあるコメデイのように。

そして刀は無事に戻り、麗華ちゃんは一安心。寿さんはこれから先、何を信じたらいいかわからない……そんな顔をしている。まあ明日になれば元通りなのだろうがな。

「滅びの言葉を使ったんじゃ、あの子はバカ共から〇ピユタを守ったのじゃよ」

守ったのはラピュ〇じゃありませんけど、なんか終羽里のは破壊力が半端ない気がしますよ間様。

7話『雨降れば修羅の道』

梅雨になると心も体もジメジメしてくる。そう思いませんか？
ここ数日の間、止むことのない雨。
今回はそんな中でのお話です。

ピンポン。

俺を闇へと引きずり込むチャイムが不気味に鳴った。

「ふぁーい」

俺は欠伸をしながら戸をあける。
力チャ。

「はじめに言っておくが貴様に拒否権はない、黙ってついてこい」

「は？」

タバコをくわえながら、結衣さんは強引に俺の腕を引っ張った。

部屋を出て雨でツルツルと滑りやすくなっている階段を駆け下りる。

「……いつてらっしゃい」

妹よ。帰ることのない兵士を見送るように手を振るな……マジで死
にに行くようで怖いから。

《103号室》

「間様。此似手完助を連れてまいりました」

「うむ……ご苦労じゃたな結衣」

103号室および管理人部屋。

ここ最近よく間様にパソコンを教えるため通い続けているので見慣
れた部屋ではある。

「なんスか間様？ 俺昨日あまり寝てなくて眠いんスけど」

間様はババッと扇子を懷から取り出し扇ぎだした。

「実は完助殿に届けてほしい物があるのじゃ」
そう言っ取り出したのは一枚の向日葵の絵だった。いつ見ても間様の絵はキレイだなあ……だが、今の俺は眠くて意識がハッキリしない状態。
お気に入りのパソコンを指さしながら何やら話しているようだが……グーグー。

「……起きろバカ野郎」
ドカツ！

「ぐおっ！」
結衣さんのゲンコツで目が覚めた俺は一つの平らな小包を渡されて部屋の外へ蹴り飛ばされる。

「……はれ？ 届け物、何で結衣さんが持つて行かないスか？」

「だから言ってんだろーが、大事な寄り合いがあるんだよ。サツサと行けよクソ野郎が！」

俺が寝ている時に言っただのか？ この小包はたぶん向日葵の絵だよな？ 間様が描いた……で、コレを何処に持つて行くんだ？ わからん！ 聞いてなかった！

「まかせたぞ完助殿。一応付き人も用意しておるから安心せい」

そう言っ間様は俺に向かって手を振る。

結衣さんかというとポイツと折りたたみの傘を俺に放り投げて戸を閉めた。

「ちょ……マジで何処に行けばいいんスカ！？ 他の人の頼んでくださいよ！」

スタタタタ！

飛び交う無数の手裏剣。

「ほあたあ！」

避ける！ 寝ぼけていても反射的に避けれる俺……実はスゴいかもしれん。もはや俺にはサイ○人の血が流れてる可能性があるな。

「サツサと行け。次はワザと外さんぞ」

半開きの戸から覗き込むような体勢で結衣さんが言った。今の攻撃はワザと外したのですか……一瞬だが自惚れたな俺。

しかし間様の話、ちゃんと聞いとけばよかった。たぶんパソコンで場所とか説明してたのだろう。

「困っているようだな」

「その声は！」

傘をさしながら反省している俺に救世主が現れた。

美しくなびく紫色の髪、豪雨の中でも香るラベンダーの香水の匂い。

「シュバリエさん！」

「今日はヒマだったのな。この任務が成功すればフェノが私を元の姿に戻してくれると言うので全力で手伝おうではないか」

ヒマってアンタ……仕事上ヒマになることないと思うんだけど。

それに元の姿に戻す件は嘘だと思う。ってかシュバリエさんは作者の都合上……減っていく年齢の限界ギリギリまで戻らないだろう。

「とりあえず何処へ向かえばいいのだ」

「えーと確かうる覚えですが○○荘って言ってたような？」

「なるほど別の荘へ届け物か？」

シュバリエさんはドコから出したのか、とんぼ町の地図をバサッと広げて他のアパートの位置を確認する。

「近場だと……暑荘があるな」

うゝわ暑そう。

「あと寒荘」

うゝわ寒そう。

「なんか違うような気がしますね」

「フェノが他に仲良くしている管理人の場所は……」

ビシツと地図の中心部を指さすシュバリエさん。

「住みにく荘」

わゝお住みにくそう。

「じゃあ住みやす荘なんかあるんじゃないっすか？」

「それは無いな」

無いんかい！

「まあ詳しいことは飛びながらしよう」

飛びながら？

バババババ！！

強烈な音が耳に響く。

そこには大型のヘリコプターの姿があった。

「ぎゃああ！ いつの間にヘリなんか用意したんスか!？」

「今さっき錬金術で作ったのだ。空に渋滞は無いからな、便利だ」
スゲー近所迷惑だ。

「さあ乗りなさい」

「なんか、こう……鬼気迫るものが。乗ったら終わりのような気がして仕方がないんスけど」

「いいから乗れ。じゃないと月に変わってオシオキするぞ」

「……御意」

渋々と俺はヘリに乗り込む。

「出発だ！」

ババババ！

おお！ ちゃんと飛んでんじゃん。確かにこりや便利だ。

「へりつて燃料とか何使うんですか？」

「知らん。テキトーだ」

バババババ！

「おゝろゝせゝ！」

ツいてないツいてない！ 俺はダイオードのマ○レーン刑事並みのツいてないぞ！
得体のしれない燃料とともに逃げ場のない空を飛んでいるなんて。

「バカ！ 暴れるな完助！」

「暴れずにいられるかっ！」

「待て待て待てゝい！」

外から聞こえる電波的な声。見覚えのあるUFOがヘリコプターと並んで飛んでいる。

「げっ！ テイル！」

「ふはははは！ 見たぞ見たぞ此似手完助！ 貴様がそのへりにお宝を入れるところを！」

お宝？ まさかこの間様の絵のことだろうか？

「コレは違うぞテイル！」

「問答無用。くらえ！ ブ○ストファイヤー！」

ズドーン！

UFOからそんな大技出すんじゃないやねえよバカ！

「完助！ 操縦代われ！」

「はぁ！？」

そう言うときシュバリエさんの身軽な体はへりから飛び出た。

手には大槍の天守閃幻。

「ちょ……シュバリエさん！ そのままじゃ〇レストファイヤーにモロ直撃ですよ！」

「そんなもの消し去る！ 唸れ！ 閃幻空雷波！（せんげんくうらいは）」

ブシャアア！

槍から飛び出す青白い衝撃波がシェリカテイルのUFOを真つ二つにした。

落ちていくテイル。

「ふええ、覚えてる～ですの～！」

ああ今はシェリカちゃんの方が……相変わらずややこしい。とりあえず泣いたなテイルめ。

しかしコチラもトラブル発生。

ガタガタガタ！

「ああ～シュバリエさん、さっきの衝撃でへりが……その」

「墜ちるな」

「墜ちますね」

ぎゃああああ！

ズドン！！

墜ちた場所は見知らぬアパート。

「いててて、ケツ打った。マジで俺ってツいて無え〜」

「尻を痛めただけで済んだのだ。むしろ喜べ」

なんなく着地するシュバリエさん。いったいどんな足してんだよこの人は。

「ここは……？」

「おやおや、お待ちしていましたよ。間さんの所の人ですね」

小柄なお婆さんがアパートから出てきた。間様と違って見るからに管理人って風格だ。

「結果オーライツスね」

「結果オーライだな」

いつの間にか晴れた空の下。俺達は、無事、に絵を渡すことができた。

もちろんシュバリエさんは元の姿には戻っていない。

8話『アレは悪魔に見えたりする』

夏になりました。

年々暑くなります。

去年もそうだった。このアパートに初めて来たときも汗をダラダラ流しながら間様から回覧板を渡されたっけな。

「懐かしいですね」

「そーだな、その時アンタは居なかったけどな寿さん」

「細かいことは言いっこなしですよ完助さん」

ほのぼのと201号室の窓から木に群がるセミを眺めながら……ク
タビレ荘の1日が始まります。

《201号室》

寿さんと別れて10分後のことである。

「何処へ行くのかな、終羽里ちゃん？」

「……遊びに行くの」

去年のゴキ○リ騒動と同じ。そう……まさに同じパターンで終羽里は友達と遊びに行く。

「兄さんはそんな子に育てた覚えはありません!」

「……怖い……蚊?」

「やや怖い……かな」

「……そう」

すると終羽里は一つのスプレーを俺に渡した。

「……餞別、じゃあ頑張って」

ボタン。

そう言うつと終羽里は行ってしまった。

「こ、これは!?!」

45%の確率で蚊を殺すカト○ススプレー!

「なんて微妙な」

ブウウン。

「ひゃあ!」

今、ヤツが俺の耳元を通りすぎた!

クソッ! やってやろうじゃないか!

『此似手完助VS蚊』
1本勝負!

【完助の体力100・蚊の体力100】

「くらええい!」

スパーン!

百円ショップで購入したキ○イチちゃんスリッパ攻撃が見事に……外れた!

「バカな!?!」

悠々と飛び回るヤツは天井に張り付いた。
クソッ、あれって叩きにくいんだよな。

「完助さ〜ん。昨日気持ちだけ頂いた桃なんですけど」
再び登場した寿さん。

「でかした千鶴!」

「ふえ！？」

「その天井にいる蚊を……！」

無理じゃん！

しまった、彼女が幽霊だと言うことを忘れていた！

「この役立たずが！」

「はわわわ……いきなり何ですか？ 怒られるような事しましたか私？」

「存在が役立たずだ！」

「ふええん！」

泣き出す役立たず幽霊。悪いことを言ってるのはわかっている、悪いのは俺だ。

だが、たぶん俺は今かなりパニックしてるのだろう……頭がな。

「それはヒドイですよ完助さん！」

ゲツ！ 恵理華ちゃん。いつの間に居たんだ？

「恵理華ちゃん！ 頼みがあるんだ。部屋の中にいる……」

「きゃあああ！」

ドフッ！

「ぐふっ！」

俺が悪い。

恵理華ちゃんに抱きつこうとしたのだから……しかも俺自身はわからないが、たぶん気持ち悪い顔をしていたのだろう。

護身術をマスターしている恵理華ちゃんの肘打ちが腹部に命中。

「何だかよくわかりませんが失礼します！」

そう言つて恵理華ちゃんと寿さんは部屋から出ていった。
にしても恵理華ちゃんに初めて怒られた……かなりショックだ。

【完助の体力80】

虎だ！ 虎になるんだ俺！

心を虎にしてこの空飛ぶ黒い悪魔を。

ブウウウン

「上等だコラア！ 核持つてこい核！ 気持ち良さそうに飛びやがつて！ その羽むしり取つてキン○バスターかましてやるから覚悟しやがれ！」

「さすがにソレは無理だピヨン」

「なんだとピヨン太……アレ？」

そこにいたのは爆乳チャイナのシエオルン。

「ピヨン太は？」

「それは私ネ、モノマネしたヨ」

まぎらわしいことしやがつて。つーかマジで似てたし。

「とりあえず飛び回る黒い物体に苦戦してるあるネ？ 私に任せ
アル」

そー言つてシエオルンは妙なダンスを踊りながら爆乳を回す。

ブルン！

ブルン！

ブルン！

「あゝ？ 何して遊んでるんですか？」

「こーやって黒い物体の目を回そうとしているますダヨ」
トンボじゃねーんだから無理だバカ野郎！

ブハッ！

ドサッ！

「ん？ 玄関の方から何か倒れる音が？」

俺が玄関の方を見ると……バンダが大の字で倒れていた。
鼻血を流しながら。

「阿呆豚！ 大丈夫アルか！？」

「テメエのパンダを興奮させただけじゃねえか！」

このコンビ駄目だ。初めから期待してなかったけど。

【完助の体力50】

限界だな。

あの兵器を使うしかない！ 終羽里にもらった○トリスプレー！

「うおお！ くらえ外道があー！」

どうだクソ野郎！ ブシュウウって、ブシュウウ？

アレ？ でない？

「チクシヨー！」

まさかのアクシデントだ……こんなときに何でも運び屋の東野さんがいてくれれば。

「ちわゝ呼ばれて飛び出た運び屋の東野です」

まさかの神降臨！

タイミングが素晴らし過ぎて涙が出るぜ！

「東野さん！」

「わかってますよ完助さん！ スーパーデラックス、蚊取り君、ハイパーです！」

メチャクチャ効きそう！

「では早速使わせてもらいます！」

これで一気に形勢逆転だ……くらいやがれ！
ブシュウウウ！

「……ん？」

ブウン！

ブウン！

あれれ？ なんだか蚊の数が増えていませんか？

俺は目を疑いながら蚊を数える。

………二十四？

俺は持っていたスプレーを確認して、そして気付いた。

「蚊呼び君」？

「はい、新商品を開発していたらできちゃいました。蚊を呼び寄せる蚊呼び君です。このスプレーを面白可笑しく有効活用してくれるのはクタビレ荘だけかと思ひましてね」

「アンタ鬼や〜！！」

約十分間。蚊達から本気で逃げた結果。

【完助の体力0・蚊達の体力100】

此似手完助はその場に倒れた。

「もう……どうにでもしてください」

俺は無抵抗で蚊達に血を吸われ続けた。

9 話『危険なのは海じゃなくて〜前編〜』

海は危険だと聞くが、危険なのは海ではなく人なのだ。

今年はクタビレ荘メンバー数名の都合が悪くて夏祭りに行けなかったため、日を改めて晶子ちゃんが企画した海水浴ツアーにて起こった悲劇をお知らせします。

《午前十時・クタビレ荘前》

ミーンミーンとセミが鳴くなか、晶子ちゃんの元気な声がセミの声をかき消した。

「ウチ車の免許取ってん」

満面の笑みの晶子ちゃん。

「俺達を殺す気ですか？」

「あははは オモロイこと言うな完助君」
笑えないぞ晶子ちゃん。

「ちなみに皆さんは晶子ちゃんの車には乗りたくないと言っております」

俺がそう言うと、晶子ちゃんは皆を睨み付けて言った。

「皆チャレンジ精神うちゅーのが無いんか！ テト〇スで下ボタンを押しっぱなしみたいなチャレンジ精神が！」
1分もたないなソレ。

ではでは説明しましょう。

今回は二台の車を使って海へ行くことになり、人数を均等にわけけるためにジャンケンで決めるという提案が出た。

問題は二台ともギユウギユウ詰めでも全員が乗れないと言うこと。

ドライバーは自称・伝説の走り屋の大坂晶子ちゃん。もう一人は――撃愛子さんだと言うこと。

晶子ちゃんが免許を取って二十四時間しか経っていないと言うこと。な……笑えないだろ。

「にしても愛子さんが車の免許を持っていたとは」

「そうなのよ完助君、あまり乗らないんだけど一応ね」

あまり乗らないにしても愛子さんの運転の方がまだマシか。

「それでは場所もわかつていることだし、アタイと阿呆豚はシェリカ・テイルのUFOで向かいますダヨ」

シェオルンと阿呆豚がUFOに乗り込む。

「ズルいぞ！俺達も乗せろ！」

「悪いが定員オーバーだ。ケケケケ……」

バカデカイUFOに何で二人と一匹で定員オーバーなんだよティール君。

ピューン！

新キャラメンバー達を乗せたUFOは勢いよく飛んで行った。チクショッ逃げやがって。

「ほなジャンケンしてや」

男には勝たねばならない時がある……それが今だ！全員で声を上げた。

「ジャーンケンン！」

「待て！」

「ん？」

シュバリエさんがジャンケンを止めた。

「私は自分のバイクで行かせてもらう」

くっ……ヘリの免許に続いてバイクの免許も持っていたのかこの人は。でも車の免許は持っていないらしいのが不思議だ。

「サイドカー付いてますけど？」

恵理華ちゃんが聞いた。

「も、もちろん……その」

少し頬を赤らめるシュバリエさん。

「終羽里殿を乗せるんじゃないかなシュバリエ」

間様がニコツと笑って言った。

やっぱりか……このレズビアンめ。

「途中で絶対に捕まりますよ？」

「心配するな完助。ちゃんと裏道を通る」

そーいう問題じゃないでしょうが。

「行こう終羽里」

「……また後でね兄さん」

ブロロロ！

俺に向かって手を振る終羽里。

二人の子供が行ってしまった。

「絶対に捕まりますよね間様？」

「あの二人のことだ、まず捕まらんじやろ。そんなことよりシュバリエは冗談が通じんからな」

「何の話です？」

「海に着く頃にはイケない関係になってるかもしれんの……あの二人」

リアルなこと言わないでくださいよ間様。

それを聞いて誰よりシヨックなのは拳使郎なのだから。

「……うっ……ヒック」

拳使郎マジで泣いてるし！

は、話は戻ってジャンケン開始。

これだけ少なくなればギョウギウ詰め何とか乗れるぞ。

「ジャンケン！ ポン！」

【愛子車メンバー・愛子、友蔵、拳使郎、間、結衣、寿】

【晶子車メンバー・晶子、完助、ピョン太、麗華、恵理華、恥芽】

ドオオオン！

俺の中の何かが爆発とともに壊れた。

「腹をくくるしかないですわ完助」

慰めてもらってるところ悪いけど麗華ちゃん……顔引きつってますよ。

「それじゃ出発ね」

手を叩いてニコツ笑う愛子さん。

「ヒョーヒョヒョ　すまめの完助君」

ムカつく笑顔ですこと……おのれ糞ジジめ。

「間様は後ろの席中央にお座りください。乗り心地が悪ければ直ぐに仰ってくださいませ」

間様の車椅子をトランクにしまいながら結衣さんが言う。

「相変わらず結衣はお堅いの」

「ありがとうございます」

「褒めとらんぞ」

次々と愛子車に乗り込んでいくなか、拳使郎だけが呆然とした顔で俺の方を見てる。先ほどの間様の言葉が相当応えてるな。

いや、俺のこと見られても行っちゃったしな終羽里のやつ。

「愛子さん！ 私はドコに座ればいいですか！？」

「そ〜ね〜？ 千鶴ちゃんは車の上かしらね？ 特等席よ」

「特等席ですか？ やったー」

ハシャギだす寿さん……気付け！ 遠回しに邪魔だと言っているのだぞ！

「完助く〜ん。はよ乗りや〜」

運転席に座り、手招きする晶子ちゃん。まるで死神が手招きしているようだ。

行きますか……地獄へ。

俺は覚悟を決めて晶子車へ乗り込む。

俺は運転席後ろに座り、膝の上に恥芽を乗せる。五人乗りの車なので仕方ない。

その隣に麗華ちゃん、そして恵理華ちゃん。

助手席にピヨン太が座った。

「安全運転で頼むピヨン」

晶子ちゃんに語りかけるピヨン太。だが……それは遅かった。

ブオオオン！

「ぎゃあああ！」

アクセス全快で走り出した晶子車。

先導するはずの愛子車をぶち抜き高速道路へ向かう。

「くつくつくつ 人がゴミのようやで完助君」

このム〇力……ハンドルを握ると性格が変わるタイプか！？

「止まってください！ 恥芽君に悪影響ですよ！」

必死に晶子ちゃんを止めようする恵理華ちゃん。

しかし決して速度は落ちない。

「お兄ちゃん怖いよ！」

「心配するな恥芽！ 俺が……」

「恵理華！ やはり乗るべきではありませんでしたわ。扉を開けなさい！ 恥芽を連れて脱出ですわ！」

「でも完助さんとピョン太さんは？」

「全力で見捨てますわ！」

ガチャ！

バサバサッ！

麗華ちゃんは俺から恥芽を奪い、恵理華ちゃんと共に翼を生やして空へと逃げた。

「おいてくな〜！」

泣き叫ぶ俺。

大人しいピョン太。

「ん？」

助手席を覗き込むとピョン太はすでに意識がなく、口から泡がでていた。

「晶子ちゃん！ このままじゃピョン太が逝ってしまうっ！」

「安心し……そのまま安らかに逝かしたるっ！」

アホかー！

鋭いドリフトと見事なドラテクで高速道路を攻める晶子ちゃん。

「おろせ〜！」

ズギヤギヤギヤギヤ！

やがて、暴走しながらもちゃんと目的地の海に辿り着いた晶子車。

「はあくスッキリしたわ」

晶子ちゃんが助手席を見て言った。

「あれ？　もしかして呼吸しとらん？」

生存者一名。

重症者一名。

死者一名？

続々と他のメンバーが集まるなか、俺はすでに疲れ果てている。

10話『危険なのは海じゃなくて後編』

海に到着しました…… かるうじてですがね。

「あらゝアレね、間様が言ってた海の家って？」

愛子さんが指をさした先には大量のサンゴ礁を屋根の上にのせた海の家があった。

「綺麗なサンゴ礁もあれだけあれば気持ち悪いのゝハッハッハッ！
笑うところじゃねえぞジジイ。」

なんで筋肉ムキムキのアンタが荷物一つだけなんだよ…… こっちは
パラソルやらなんやら持たされて死にそうだぜ。

くそゝ全て俺に押し付けやがって、このクソ忍者め！

「なにか俺に言いたそうな目だな完助」

タバコをふかしながら俺を睨み付ける結衣さん。

「なんでもありませんよ」

ゆつくりと…… だが確実に海の家に近づき、先に着いていた間様が
手招きをする。

海に来ている人はたくさんいるのに何故か一つの大きなテーブルが
空いていた。

そのテーブルの上にドサツと荷物を置く俺。

「ん？ 予約席…… 八乙女^{やおとめ} 千年^{ちとせ}って誰なんだ？」

「私の本名じゃ完助殿」

「えええー！！」

ついに明かされた間様の本名。 そももってコードネームがフェノ
クロス…… 実にややこしいッス。

…… だが新たな疑問が生まれてしまったな。
なんで‘間様’なのだろうか？

《砂浜》

俺は用意していた海パンを着用して砂浜をうろつく。

間様は予想通り海の家に残り、結衣さんも間様の側で警護……と言っているがカナヅチを隠すための言い訳だろう。

去年のプール同様、見たかったな……水着姿。

ジジイはすでに泥酔。あまりに早すぎるジジイの飲酒に呆れる愛子さん。

とりあえずほつとくに限るな。

「ん？ 恥芽？」

砂浜で座り込んでいる恥芽を発見。晶子車では怖い思いさせたし、一緒に遊んでやるとしますかな。

「おう恥芽！ 何して遊んでんだ？」

「あ、お兄ちゃん。うん……何しようか悩んじゃって」

「泳がないのか？」

しまった、そういえば恥芽はプールに行った時も泳げなかったっけか？

「前よりかは泳げるようになったんだけど、今はちよつと疲れちゃって」

「なら仕方ないな……よし恥芽、何がしたい？ スイカ割りか？

ビーチフラッグか？ それとも近場の林立地帯でセミ取りか？」

「じゃあ碁石並べ」

めっちゃめっちゃ地味な遊びじゃん。

ヤバい……明らかに場の空気が重くなってきたぞ。

「……ブツブツ」

お？ フラフラと歩きながら呟いている拳使郎を発見。

「おい拳使郎！ 一緒に遊ばなっ……」

拳使郎の体から漏れだすドス黒いオーラに俺は言葉を詰まらす。

拳使郎はクルツと振り返り、俺達を見つめて言った。

「安西先生……バスケがしたいです」

終羽里の件で完全に壊れてやがるなコイツ。

《海岸》

ん？ あれは俺が用意したブルーシートじゃないか？ 何故に海岸に放置されてるんだ？

「あのブルーシートの上でアタイにオイル塗ってくれないアルか完助？」

俺の背後から現れた巨乳シェオルン、見事に俺の背中にその胸がムニユと当たり心地好い感触だ。

「よ、喜んで〜！」

そうか、あのブルーシートはそのためのものか。作者のヤツめ、たまには俺にもおいしい思いさせてくれるじゃないか。

ガスッ！

「げはっ！〜！」

その胸に飛び込もうとした瞬間に後頭部に衝撃が走った。

「てめえ阿呆豚！ 何しやがるコノヤロー！」

「目がエロイんだよ、キサマには絶対にやらせねえ」

「だったらボクが塗るピョン」

あれ？ 晶子車暴走事件で死んだんじゃないかったのか？ このウサギ？

「ボクの黒魔術でパーフェクトな塗り心地を味あわせてあげるピョン」

「いや〜ん、楽しみアルよ」

ん〜なんか良い感じに壊れた雰囲気になってきたなコレは。

「とりあえずウサギを止めるパンダくん」

「てめえの命令じゃ乗り気にならねえが仕方ないな」

ゴスッ！

「ビヨッ！」

阿呆豚のハンマーパンチが炸裂し、ピョン太は地面にめり込んだ。

「アタイを巡って争うのはやめてほしいヨ」

頬を赤らめて照れるシェオルン。

もう馬鹿馬鹿しくて付き合いきれんな。

《浜辺》

コレだ！

海といえば、まさにコレと言っても過言ではない！

水着！

そつ、美女の水着姿を見るために海があると言えるだろう。立花姉

妹の水着姿は太陽より眩しいほど美しい。

いや……言い過ぎた。

しかし美しいのにはかわりなく、今回はさらにシェリカちゃんの水着姿も見れてレアだ。

ティールじゃなくて良かったぞ。

そして。気合い入りまくりの迷彩柄の海パンと、その海パンに良く似合う筋肉。実に惚れ惚れして……し。

「つて、オイそこの軍人」

「なんでありますか完助ボーイ」

俺の右手が容赦なくチャールズ大佐の首を掴んだ。もはやコレは反射的と言える。

「テメエのせいで美女の花園が台無しだ」

「なんのことですか？」

「ようするに場違いなんだよテメエは！！」

俺は掴んでいた右手を海に向かって振り下ろし、チャールズを投げ飛ばした。

「アアアアアア！！」

ドボン！

その距離三十メートル。人間やろうと思えばやれるものだな。

「……で、見物料として。あなたの首を貰ってもいいのかしら？」
背後には麗華ちゃんがまさに今、刀を抜こうとしていた。

「あれ？ いつの間に？ 海で三人、ビーチボールで遊んでたハズじゃ？」

「ふふつ、死ぬ人間が今さらそんなこと聞いても意味がなくてよ」

「姉さん……とりあえず落ち着いてね」

「そーですよ、人殺しは良くないですよ」

んゝ恵理華ちゃん、シェリカちゃん。なんかもう彼女に何を言っても止まらないと思いますよ。

「最近暴れ不足ですよ！」

シャキーンと音をたてた刀が俺の首に斬りかかった。

「嘘つけ暴れ過ぎでしょゝがゝ！」

間一髪で俺はしゃがみ込み避けたが、二撃目が直ぐ様やってきた。

キイイーン。

その時、二人の少女が俺を護った。

見たことのある槍が麗華ちゃんの刀を止めている。

「おお！ 終羽里！ シュバリエさん！」

助かった。

「フン、まあ今回は見逃してさしあげますわ」

さすがに麗華ちゃんでも、この二人にはただでは済まないことが分かっているようだ。刀を収めて去っていった。

「……大丈夫？ 兄さん？」

「いや、本当に助かった」

しかし、なぜ麗華ちゃんがあんなにもピリピリしていたかは本当に謎だ。

「そういえば完助。晶子がオマエを探していたぞ」

槍を片手にシュバリエさんが言った。

なんか嫌な予感がするな。

《水上バイク置き場》

「はあ、い完助くうくん。ウェルカム」

ビバ予感的中！

「あの、晶子ちゃん。状況が飲み込めないのですが」

「見たままやで完助君。特別にウチの水上バイクテクニクを体験させてあげるんよ」

遠慮させてください！

……と、言う前に俺の体は晶子ちゃんの手によって水上バイクに乗っていた。

晶子ちゃんの運転する水上バイクの後ろに股がりながら、俺は声が渴れるまで叫び続けた。

「いつそ殺してくださあああい！！」

11話『デンジャラス最前線』

海での一件から三日後。

良い感じに肌が焼け、風呂に入るとヒリヒリする俺の体。

そんな体に鞭をいれて、いつものようにバイトに明け暮れる夏休み。休みが多い大学生は今が稼ぎ時なので毎日必死だ。

「ちよつと息抜きも必要か」

と、独り言を呟き……バイトの帰りに軽い気持ちで阿修羅商店街にあるゲームセンターへ向かった。

二、三百円くらい使う程度で止めればいいかな？

しかし、そこは俺の不幸運命……抜かり無しである。

「ばんなそかな！」

思わず作者のお気に入りドラマの名セリフが口から漏れた。

とりあえず俺は驚いた、その『ボコボコ・オブ・ファイターズ』（以降、略・BOF）という格闘ゲームの席に座る一人の男に見覚えがあったからだ。

「す〜す〜き〜!!」

何故ココにチャールズの唯一の崇拝者である鈴木がいるのだ。

渡米したんじゃないかったのか？

しかも。こんな所で、あんな恰好で！

「お前いつの間にオタクになったんだよ？」

思わずゲームに夢中の鈴木に言った。

まさに今の時代はオタクブーム。

そのオタク街道まっしぐらと言いたくなるくらいにダサイキャラクターTシャツにボロボロのジーパン。そしてドラ○エのト○ネコ並

に膨れ上がっている背負いカバン。

「お久しぶりであります兄貴！」

こちらに気付いた鈴木が俺のところへ歩み寄る。

「近づくんじゃないやねえ！ 俺も似たようなタイプだが、そんな眼のデカくてゴチャゴチャした衣装の女性キャラなんて知らん！」

Tシャツに描かれているキャラクターを指差して俺は言う。

「知らないんですか兄貴！？ プリンセス雅男ですよ！」

そのナリで雅男って意味わからんにも程があるキャラクター万歳！

「にしても、チャールズが知ったら驚くぞ」

「イエース。とても驚いてまゝス」

でた！ マジでチャールズのおでましだよ！ コメディお約束の『都合の良い登場』…… 今回も余計なお世話だっつーの！

「チャールズ大佐！」

「鈴木二等兵！」

ガシッ！ と、二人は息の詰まるような抱擁をした。

「おい。君たち、見てる側にとっちゃメチャクチャ気持ち悪いから止める……そろそろ」

「フッフッフ……二人が揃えば怖いもの無し。今なら完助の兄貴をBOFで瞬殺できますよ大佐！」

「もちろんでありまゝス！ みせてやりなさいマイボーイ！」

なんでそうなる！？

どうすればそうなる！？

「帰る！ テメエらに付き合う気は無え！」

チャールズ達に背を向けた俺の後頭部にガチャッと鈍い音のする何かが当たった。

「席に座って楽しくゲームをしましょう完助ボーイ」

振り向くとシヨットガンが俺の目の前に姿を現す。

めちゃくちゃ強制じゃん！

デ○ノートに名前書かれた後で、死の内容を自由に書かれた気分だ。せめてクレーンゲームで勝負させろ、格闘ゲームは大の苦手だ。

百円をゲーム機に入れてピロンと効果音が鳴る。

BOFというゲーム名が画面を覆いつくし、すぐにキャラクターセレクト画面になった。

様々なキャラクターがいるなかで、鈴木は迷うことなく肌が紫色で異色な恰好をしている男キャラクターを選んだ。

名前は『ベチユナーガ』

誰だ……こんな変質者みたいな名前にしたヤツ。

ネーミングセンスが無いにもほどがある。

そんなキャラと打って変わって、俺が選んだキャラクターは赤い着物を着た可愛い女の子。

……だが名前は『ドポポ』

このゲーム一遍死ね。

どこの民族だコリヤ？

『レディファイト！』

ドカツ！ バキッ！

『KO』

優雅だ……お見事です。

あつという間の連続コンボで、まさにゲームの題名のようにボコボコにされました。

いや、本当に素晴らしい。

「もう一度だ」

なにもできずに負けたのは、いくらなんでも悔し過ぎる。

ピロン。

次はクマのようにデカイ図体をした男性キャラの『キム・チョンペリ』を選んで鈴木に挑んだ。

『レディファイト!』

ドスッ! メキッ!

『KO』

うがぁぁ! 次はえ〜と?

『斜藻児』

……たぶん、『しゃもじ』と読むのだろう。キャラクターの手に大量のしゃもじを持っているから間違いない。

『レディファイト!』

ドドドドッ!!

『KO』

屈辱だ……極道の女がドコの馬の骨かもわからないチンピラに股を開くくらい屈辱だ。

「ラスト〜!」

ドォーン!!

『KO!』

キャラクター選択画面ですでに負けるといふ裏技をやられた。

「テメエの血は何色だー!!」

ニヤニヤと笑みを浮かべながらゲーム台から身を乗り出して俺を見るチャールズと鈴木。

チクショウ。俺はもう迷わない、アイツを呼ぶしかない!

「終羽里せ〜んせ〜い!!」

「……何？ 兄さん？」

あ、本当に来た。冗談のつもりだったのにな。

と、言うより妹の名前を叫んで周りからの視線が痛い痛い。後悔した。恥ずかしい。

「え、え〜とですね妹よ。鈴木があまりにもム力つくので、図に乗る前にへこましてもらいたいのだが」

「……そう。理解したわ」

すると終羽里は席に座り、鈴木に向かってお辞儀した。

「……はじめまして。此似手終羽里です」

いやいや初対面じゃありませんよお嬢さん！

「ハッハッハッ！ 今となつてはデンジャラスガールも怖くありません！ やってしまいなさいマイボーイ！」

「イエッサー！」

興奮のあまり天井に向かってショットガンをぶっぱなすチャールズ。

迷惑迷惑！

「終羽里、このジャージを着た男キャラが強そうだぞ」

「……じゃあコレにする」

相変わらず何を考えてるのかわからないボーとした顔で画面を見つめる終羽里。よし、お得意の能力でパパッと倒しちゃえ。

「フフ……残念ながらこのベチュナーガは魂を持たないうえに魔法も効かないキャラなのですよ兄貴」

「なにっ！」

「そういう設定で生まれたキャラクターなんですよ」

なんてこった！ つーか都合の良すぎる設定だなオイ！ それが本

当ならマズイぞ！

「ヤバくないか終羽里？」

「……問題ないわ兄さん」

そついうと終羽里は素早くコマンドを入力した。

『上下上右下左上右下右下左上………』

途中でパンチやキックボタンなども加えて最後にスタートボタンを押した。

ジュワワワワン。

次第にベチユナーガの姿が消えていく。

「なんだなんだ？ 何をしたんだ妹よ？」

「……データ消去。存在自体を消してみたの」

コイツの血も何色だー！！

「うわあああ！ ベチユナアアガアア！！」

そう叫びながら席を立ち、走り去っていった鈴木。

その後、彼の行方を知る者は誰もいない。

12話『寿物語』（前書き）

癒し系幽霊・寿千鶴ちゃんのストーリーです。
ちよっぴり泣けたら泣いてみてください。

12話『寿物語』

明朝の降りしきる雪の中。私は柊橋をふわふわと飛びながら渡りきる。

そこはちよつとした広場になっています。周りの建築物の構造上とても音が反響しやすくなっていて、若者達の溜まり場になり毎日、
「りずむ」に合わせて「だんす」という踊りを踊っているのです。
私はそんな場所で毎朝、いつものように大きく深呼吸をしてこっぴどいのだ。

「みつなさん！ あーさーでーすーよー！」

これが私の……クタビレ荘に住んだ日から毎日おこなっている行事だったりします。

そんな私に。

好きな人ができました。

【柊橋広場】

「みつなさん！ あーさーでーすーよー！」

いつものように広場で声を上げると、この場所で初めて声をかけられました。

「うるせえんだよ朝っぱらから」

「むむ……何奴ですか？」

そこにいたのは一人の少年でした。歳は拳使郎君くらいでしょうか

？ 雰囲気も同じような気がします。

「別に誰でもいいだろ、とにかくその叫ぶの止めてくれよ」

「それは駄目ですよ……私の日課なんですから」

毎度悲しい幽霊と人間の会話が……あれ？

なんだろうこの子？ 普通の人とは何かが変です？

「んゝ君が透けてるように見えるのは私の気のせいでしょうか？」

「当たり前だろ幽霊なんだから。誰にも話しかけられることなく」
「コにいるんだよ俺は」

羨ましい……いやいや間違えた。

可哀想です、でも私なんかより全然幽霊っぽいのが悔しいです。

「お前さ、飛ぶの止めるよ目障りだから」

「なぬぬ！ 飛べない寿はただの寿です！」

「それジブ〇映画の紅の〇だろ？」

「えへへ。最近観たんですよ……お気に入りの‘せりふ’です、取っちゃ嫌ですよ」

「取らねえよアホ」

「でもでもですね。幽霊は飛ぶものなんです。貴方の方が変なんじゃありませんか？ 足ありますし……幽霊として失格の駄目駄目ですよ」

私はびしつと少年を指差し言ってやりました。

「テレビの心霊番組じゃ飛んでる幽霊は逆にダサイぜ」

「がゝん！」

「それに今時幽霊の服装も和服はウゼエ」

「ががぐん！」

「なにより癒し系は時代遅れだ」

「はわわわわ……言わせておけばぐん！」

私は両手をぶんぶん振り回しながら逃げる少年を追いかける！

……そして見事に追いつけずに私は諦める。

「ぜえ……ぜえ……」

「幽霊が疲れてんじゃねえぐよバグ力」

私はこの身が朽ち果てようとこの少年を一発殴らないと気がおさまりません。肉体ありませんけど。

「くはは……お前面白いな。オレ嫌隼勝嘉ヨロシクな」
いやはやまさか

見事なまでに一話で消えそうな名前です。

「私は寿千鶴です！」

それから私達は、時間とともに増えてくる人々を余所に無我夢中で遊びました。蹴鞠やお手玉で遊ぶ事しか知らない私には理解できないような遊びばかりでした。

幽霊だから出来る映画館のタダ観というのもどきどきしました。

そして、たくさんお喋りもしました。

私の住ませてもらっているクタビレ荘の事はもちろん、私の巡ってきた日本各地のことなどです。

もちろん勝嘉君の事も……「さっかー」という部活の「きゃぷてん」だったということや。妹さんを車の事故から救うために自らの犠牲になったことなど。

私達は日が暮れるまで語り合いました。

【夜の103号室】

「どういことなんです間様!？」

間様に向かって私は怒鳴った。

「落ち着かれよ寿殿。その少年はいずれ土地神になろう……たぶんその広場の近くが事故のあった現場なのじゃ」

「土地神になつたらどうなるんですか？ 成仏させたほうがいいなんて」

「土地神になると生きていた時の事は一切忘れていずれ悪さをする可能性があるのじゃ」

だからってあんまりですよ。

「もはや少年に未練は無いハズじゃ。妹さんは昨日交通事故で亡くなられておる、じゃろ結衣」

「ハイ、調べたところ確かなようです」

「そういう運命だったのじゃ……遅かれ早かれ事故で亡くなる。きつと冥界で兄を待つておることじやろう」

それを聞いた私は居てもたつてもいられなくなり、思わず外へ出て柊橋広場へ向かってしまった。

「よろしいので間様？」

「恋せよ乙女……じゃよ結衣」

私が去った一 三号で間様がそう言った。

【柊橋広場】

「勝嘉君！」

「おう、どうしたんだよ千鶴？ また幽霊のくせに息を荒くしてさ」
広場のベンチに腰掛けていた彼は私と違ってとても落ち着いていた。

「勝嘉君じつはですね……あの……」

「言いたいことはわかるぜ。妹が死んだんだろ？ お前がアパートに帰った後でそのゴミ箱に入ってた朝刊でみたよ」

「……勝嘉君」

勝嘉君はふわつと宙に浮き、だんだんと空へと飛んでいく。

「お前が成仏したら必ず俺に会いに来いよな」

私に向かって微笑む勝嘉君。

「はい。いつになるかわかりませんが……必ず」

私の目から涙が流れた。幽霊だって涙を流したっていいじゃないか。

「その時さ、地獄へ行つてデートしようぜ。そっちのほうがスリルあるじゃん」

「はうゝお断りいたしますですよゝ」

最後まで明るい子でした。

そして勝嘉君は空へと消えて、また今日も雪が降りました。たくさんたくさん降りました。

私の体には感じませんが、とても寒かったです。

そう……とても。

【次の日の二 一号室】

「完助さん！ 妹さんは大事にしてくださいね！」

ぱりぱりと頭を掻きながら、ズレたメガネをかけ直す寝起きの完助さん。

「なんだよ朝っぱらからよ、言われなくても妹は丈夫過ぎるぞ」

「いいから大事にしてください！」

どうしてもかはわかりませんが、どうしても言いたかったんです。

どうしても。

どうしても。

「ああ……わかったよ」

よし。

では、今日もあの場所へ……いざ出陣です寿千鶴。

最終話『帰る場所』

季節はすでに春となったある日のこと、俺が目覚めた場所は……
繁華街のゴミ置き場だった。

「ん〜が〜頭が痛い。ココは何処だ？」

確か大学の友達と久しぶりに飯を食いに行つて、夜はカラオケ行つて……居酒屋行つて……ん〜？

ダメだ思い出せん。きっと酔いつぶれて寝てしまったのだろう。

で、俺一人だけか……あのバカ野郎オレを見捨てやがったな！

「え〜此似手完助、迷子であります」

《2時間後》

ありえん！ さっきから同じ所を何度も歩いてる気がする。

繁華街をさ迷い続けたが、何度も同じ看板の店が確認できる。
それに人の姿もない……それに。

「霧……濃っ！」

まさかココは間様から前に聞いたことがある幻の都『メビウス』。
ケータイの電波も無ければ、決して人とは出会えないと言われているらしい。

この霧が何よりの証拠で、神出鬼没らしく……まるで神隠しだ。

「おい誰か助けてくれ〜！ 妹よ〜！ 間様〜！ ……………」

俺はクタビレ荘の皆の名前を順番に叫び続けた……声が枯れるくらいに何度も何度も。

「グルルルッ！」

グルル？

背後から感じる嫌な気配……だが、あまりの寂しさに俺は恐怖を捨てて振り向いた。

「なんじゃコリヤー！！！」

実にシンプルに説明しよう。

一つ目怪獣が現れた。

「グルアアアアア！」

「ぴいぎゃあああー！！！」

忘れててすみません！ コメディだったこと忘れててすみません！

「冗談じゃねえぞ！ 最終話で食われて死ぬのは嫌じゃ！」

まだ管理人と恋に落ちて『1つだけお願い……1日でもいいから私より長生きして』って言われてないし、宇宙人の少女と禁断の恋とかしてないし。何より双子の姉妹とあんなことやこんな……。

「ぶへっ！！！」

怪獣のメガトンパンチが俺の体を軽々と吹き飛ばす。

「つかナイスなツッコミだ。俺の脳内暴走を見事に止めてくれた。

こんな形で出会わなければ相方にしたいくらいだぜ。

しかし避けることに關しては神的だった俺も……もはやココまでの男だったというワケだ。妹よ、こんな情けない兄を持ってすまなかった。俺のことは忘れて一人でコレからの人生を生き抜いて……。

「……兄さん？　こんな所で何してるの？」

霧の中から現れたのは……やっぱり何でもありな我が妹、此似手終羽里。

だが、さすがの終羽里でもこのメビウスに来れるものなのか？

まさか幻？

「お前本当に終羽里か？」

「……うん」

「今朝何食った？」

「……サンドイッチ」

「何個食った？」

「……151個」

「ポケオンか！？」

「俺のことは？」

「……好き」

「グレイト！」

120パーセント終羽里だ。一瞬だけでも疑った自分が情けない。

だって俺に話しかけた時点で一つ目の怪獣を瞬殺しているところが、完全に終羽里ではないか！

「終羽里！　助けに来てくれたのか！」

俺は涙を流しながら妹に抱きつく。他者から見たら情けない光景だが、もはやそのようなプライドはクタビレ荘に暮らし始めてからとつくに捨てている。

「……うん。ほつといたら兄さん最終話で無理矢理食われたりして死ぬようで危なっかつしいもの」

「まさにソレでした今まさに！」

「……兄さんには帰る場所があるじゃない。せめてそこで死ぬべきよ」

え！ 死ぬことは決定されてんのか妹よ！

「……………行こ……………兄さん」

「ん……………ああ、でもココから出られるのか？」

「……………大丈夫。ゲート作るから」

うそ〜ん！ ゲートってそんな簡単に作っていいものではありませんか！？

「とにかくココとはおさらばだ。俺には帰る場所があつて、騒がしい連中とまたバカやらないといけないからな」

「……………そうね」

帰ろう。クタビレ荘へ。

終羽里が手をかかげると、掌から光が漏れ出しみるうちに霧が晴れていく。

そして虹色の球体が現れ、終羽里とともにその中をくぐった。

抜けた先は今にも崩れそうなアパート。あの毎日が騒がしいアパート。

とんぼ町にある我らがクタビレ荘。

階段を駆け上がり、俺は201号室の扉を勢いよく開けて叫んだ。

「ただいま〜！！」

おかえりなさい此似手完助。

さあクタビレ荘の愉快な日々をまた供に築きあげようではないか。

最終話『帰る場所』（後書き）

『続・クタビレ荘の生活』

まずは無理矢理な形で終わらせてしまったことをお詫び致します。

未熟な身でありまして、連載を長期に渡って止めたりしました。たくさんの誤字もありました。

でも本当に楽しく書かしていただきました。読者の方々に少しでも楽しめていただけていれば幸いです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367c/>

続・クタビレ荘の生活

2010年10月21日21時11分発行